第9回

農耕

柳　幹康

農耕はインド仏教において僧侶に相応しくない行為として禁じられていたのに対し、中国では禅門の美徳として積極的に奨励されるようになります。今回はその流れを紹介します。

インド仏教において僧侶は、農耕に従事しませんでした。その規範を記した律には、以下の三つの項目が見えます。

第一に、僧侶が地を掘ることは禁じられていました（掘地戒）。仏教では大地そのものに命があるとは考えませんが、そのように考える異教の人々に配慮した結果、大地の掘削が禁じられたと伝えられています。

第二に、草木の伐採も禁じられていました（伐草木戒）。草木に住まう神々や虫・鳥に配慮したため、および世間から「草木の命を奪った」と批判されるのを避けたためだといいます。ちなみにインド仏教では当初、草木も生命・感覚を有すると考えていましたが、後には無情（心を持たない非生物）と看做されました。中国に入ると無情である草木にも仏性（仏としての本質）が具わっていると考えられるようになり、日本では更に草木も有情（心を有する生き物）同様、自ら発心し、修行し、悟りを開いて涅槃に入ると言われるようになりました（『天台小部集釈』「草木発心修行成仏記」）。

第三に、虫のいる水を草木に注ぐことも禁止されていました（用虫水戒）。もちろん水中の虫の命を護るためです。

インドにおいて宗教者は、農耕に携わるべきでないと長らく考えられていたようです。上述

の律が整備される以前の様子を伝えると思しき古い経典には、植樹や伐採を行なわないことが釈尊の美徳として挙げられており、これは当時の宗教者に対する通念を反映していると考えられています（『長阿含経』巻一四「梵動経」）。また仏滅後五百年以上の後に編まれた大乗仏教の新しい論書にも、農耕は四邪命食――不当な手段により得た四種の食――のひとつに数えられています（『大智度論』巻三）。

百丈懐海（『仏祖道影』禅文化研究所、一九九七年）

中国仏教においても当初は上述の流れを承け僧侶による農耕は為されていませんでしたが、八世紀に禅宗が興隆すると、禅僧たちは積極的に大地を耕しだしました。その独自性を示すものとして有名なのが、百丈懐海（七四九―八一四）の「一日作さざれば、一日食らわず」――農耕に勤しむ百丈を見て忍びなく思った僧侶がその農具を隠したところ、百丈は休むことを肯わずにそれを探して回り、結果食事を取り忘れてしまったという逸話――です。ちなみにこの「一日作さざれば、一日食らわず」という言葉は今日、百丈自身の発言として紹介されることがままありますが、中国の古い文献では百丈の行為を評した周囲の言葉とするのが一般的です。また例外的ではありますが、なかには過激なバージョン――農具を隠されたことに対する抗議として百丈が食を断ち、そのまま餓死してしまったという異聞――も見えます（『虚堂和尚語録』巻四）。この壮絶な百丈餓死の伝説は三百年後

に日本で思わぬ余波――その是非をめぐり火花を散らした一休宗純（一三九四―一四八一）とその兄弟子養叟宗頤（一三七六―一四五八）との言い争い――を引き起こしました（『一休和尚年譜』六十一歳の条）。

百丈は禅宗の農耕と縁が深く、この外にも次の二つの話が伝わっています。第一に、彼が制定したと伝えられる――実際には後代に編纂された――清規（禅僧の規範）には、上下の別なく一寺全員で力を合わせ農作業などに当たる「普請の法」が、禅宗で為すべきこととして特記されています（『景徳伝灯録』巻六「禅門規式」）。第二に、戒律に反して草木の伐採と大地の掘削を行なうことの是非を尋ねられた際に、百丈は「一切皆空（あらゆる物に実体はない）という道理を体得していれば罪過は無い」と答えたといいます（『古尊宿語録』巻一）。

インドと異なり中国では、僧侶の農耕は大いに歓迎されました。そもそも中国には農業を重んじる伝統があり、インド仏教以来の農業に従事しない僧侶の有り様は、しばしば問題視されたのみならず、それを理由に破仏（仏教弾圧）が断行されることもありました。中国で禅宗が教線を急速に伸ばし地に深く根を下ろしたのは、その農耕に依るところも小さくなかったように思われます。

【主な参考文献】遠藤純一郎「中国仏教に於ける経済――百丈懐海が転換したもの」『蓮花寺仏教研究所』二、二〇〇九年。岡田真美子「仏教における環境観の変容」『姫路工業大学環境人間学部 研究報告』一、一九九九年。木村清孝「中国仏教をめぐる「不耕而食」の問題」『仏教経済研究』五、一九七三年。花園大学文学部『三国伝来 仏の教えを味わう――インド・中国・日本の仏教と「食」』臨川書店、二〇一七年。平川彰『平川彰著作集』一〇・一六、春秋社、一九九四・二〇〇〇年。柳幹康「悟る草花、教えを説くガレキ――インド・中国・日本の無情観」『カールベッカー氏柳氏講演録』臨済宗妙心寺派宗務本所、二〇一七年。

柳 幹康（やなぎ みきやす）
一九八一年栃木県生まれ。二〇一三年東京大学大学院博士課程修了、博士（文学）。現在東京大学東洋文化研究所准教授、花園大学国際禅学研究所副所長。

お願い

花園俳壇・花園歌壇

俳壇・歌壇への投稿は、それぞれ別の郵便はがきを使用し、
各三句(首)までを読みやすく書いてお送りください。
＊〆切りは毎月1日です。

『花園』へのご意見・ご感想など

本誌へのご意見・ご感想など、「編集室花園係」までお送りください。
お待ちしております。

送り先

〒616-8034 京都市右京区花園木辻北町1
妙心寺派宗務本所内編集室
俳壇／歌壇／花園　係

＊住所、氏名を必ずお書きください。
＊俳壇・歌壇ともに作品は未発表のものに限ります。(他誌投稿作品、転載は不可)
＊なお投稿はお返しいたしません。

花園 hanazono

「いつもココロに花園を」
あなたとわたしのポケットエッセイ集

【花　園】第73巻 第12号(通巻第868号)
令和5年12月1日発行(毎月1日発行)
定価60円
【発行人】野口善敬
【編集人】箱崎善法
【印刷人】古崎良一
【発行所】京都市右京区花園木辻北町1
妙心寺派宗務本所 教化センター
振替／01060-9-1400
電話／075-463-3121

表紙の絵

「暖かな雪」

純白の祝福が
皆様にふりそそぎますように。
絵・元場 葵(もとば あおい)

月刊『花園』1冊送りの年間購読料は、1,620円(税・送料込)です。
下記のお電話か、ホームページでお申込みください。

【妙心寺派宗務本所 頒布課】電話：075-467-2990

【妙心寺派直売店 web shop】
http://www.myoshinji-shop.jp/fs/myoshinji/g05-0002

＊乱丁、落丁本はおとりかえいたします。